

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2015 冬号 **73**

公益財団法人 和歌山県文化財センター



特集①

幻の寺別寺

わけであら

—小松原Ⅱ遺跡—

湯川氏館発掘調査整理業務から—

特集②

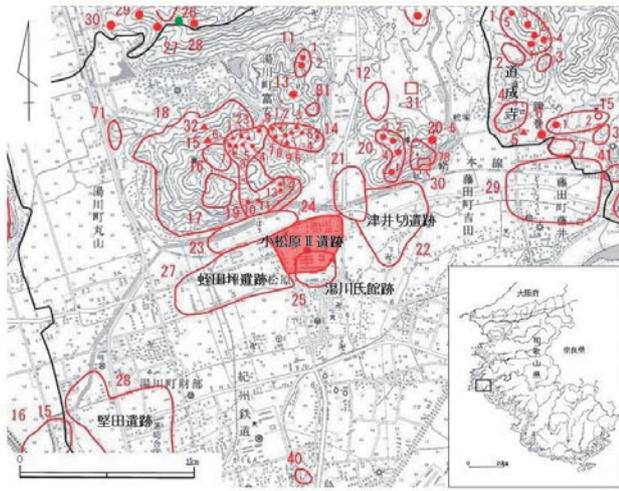
平井遺跡、平井Ⅱ遺跡の出土遺物等整理業務から見えること



(上) 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡 調査区2
(下) 平井遺跡 第1次調査地全景(西から)

特集① 幻の寺別寺わけでら — 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館発掘調査整理業務から —

現在、二〇一三年に実施した御坊市小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡発掘調査の整理業務をおこなっています。調査では、奈良時代の溝から八世紀初頭とされる道成寺創建時の軒丸瓦と同形式の瓦片が見つかりました。既往の調査でも古代に遡る平瓦の破片は多く出土しており、小松原Ⅱ遺跡付近に古代寺院が存在することは予想されていました



遺跡位置図

が、出土した軒丸瓦から、寺の創建が白鳳時代に遡ると判断できるようになりました。さて、この寺ですが、基壇などの遺構も残っており、言い伝えもないことから幻の寺と言うことができます。ただ、日本最古の仏教説話集である「日本霊異記（日本現報善悪霊異記）以下霊異記」にこの寺ではないかと考えられる記述があります。

霊異記は平安時代初めに成立し、善い行いすれば報われる、悪い行いをすれば罰を受けると言った説話を集めたものです。著者は奈良薬師寺の僧・景戒（けいかい・きょうかい）です。景戒は紀伊国名草郡の出身であるとされ、本のなかにも和歌山県内の説話も多く収められています。話の内容が実話か否かは別として、話に出てくる地名や寺には実在するものが多くあり、また当時の時代背景や世相を窺う史料と言えます。

霊異記は上・中・下巻全一六話からなり、その下巻三三話に登場する別寺わけでらが小松原Ⅱ遺跡付近にあったと想定することができます。話の内容を簡単に書くと、

「紀直吉足は、紀伊国日高郡別の里の倚たより家の主人であった。吉足は生まれつき性格が悪く、因果応報を信じなかった。

延暦四（七八五）年の夏五月、国司が郡内を巡って正税せいぜいの稲を人々に賜り、日高郡でも広く人々に与えた。官の許しを得ていない私度僧しどそうである伊勢の沙弥しゃみが、「薬師経」の十二薬叉やくしゃの神名を唱えて、里を巡っては食乞いをしていった。正税の稲を与える人の所て稲を乞い、また、凶悪な吉足の家でも乞い願った。吉足は物を施さなればかりが、僧が持っていた稲を巻き散らし、法衣を剥ぎ取って殴りつけ脅した。僧は別寺の僧坊に逃げ込んだ。吉足は追いかけて僧を捕まえ、自分の家の門まで連れてきた。（以下略）」とあります。

説話は極短いものですが、奈良時代後期



道成寺創建期の瓦と小松原Ⅱ遺跡の瓦（写真）

の状況がよく窺えます。大胆かもしれませんが、空想を逞しくしてみます。

まず、紀直吉足ですが、苗字が「紀」名が「吉足」です。「直」は古代の氏姓制度において位などを顕す称号で、地方の豪族などに与えられます。紀伊国の国司も紀直であることから、その一族と考えられます。紀氏は、和歌山の紀北・紀中地域の海岸線沿いの要所・要所に拠点を置き地域を治めていたと考えられます。平安時代の初め頃のことですが、有田郡では紀氏が郡の長官や役人を務めており、吉足もまた、日高郡の役人であった可能性があります。

次に正税の稲ですが、これは郡の役所である郡衙の正倉に保管され、出挙として貸し出されたりします。僧沙弥が郡衙の正倉で稲を乞い、その後、吉足の家へ寄つていきます。このことから、郡衙の近くに吉足の家があったと想像することができます。次に、吉足の家から逃げ込んだのが別寺ですから、吉足の家と別寺が別寺であり、吉足の家と別寺が別寺が別寺になり、郡衙・吉足の家・別寺が比較的近い位置にあったと考えることができます。

さて、別寺ですが、僧坊を備えていることから僧が何人もいたことになり、単なるお堂などではなく、大きな寺であったことが窺えます。

ところで、日高郡の郡衙は、日高振興局付近の堅田遺跡で見つかっています。規則

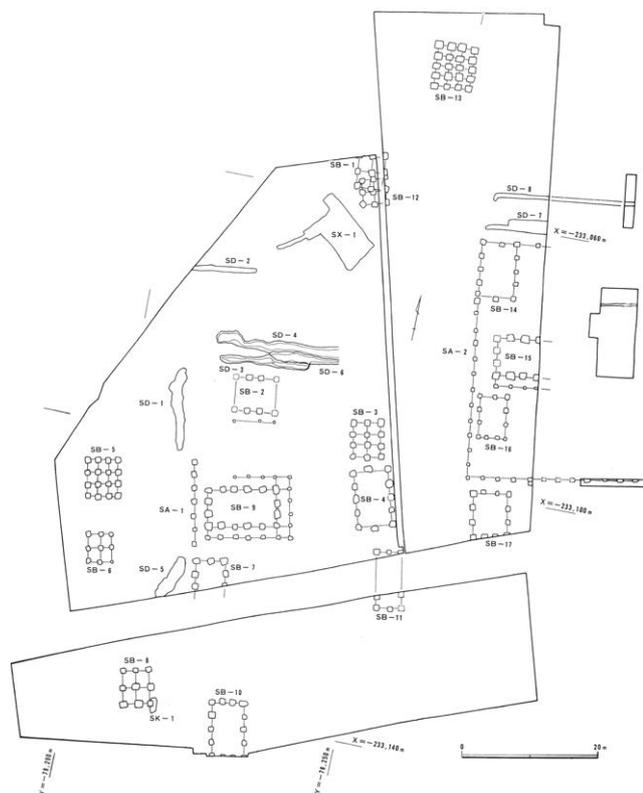
正しく配列された大きな掘立柱建物は何棟もあり、正税などを蓄えたと考えられる倉跡も見つかっています。ただ、堅田遺跡付近にあった郡衙の遺構は奈良時代前半頃までで、奈良時代後半以降は、他所に移っていることが出土した遺物から窺え、靈異記の話にある奈良時代後期には郡衙は堅田遺跡付近になかったこととなります。日高平野で、奈良時代の遺物が多く出土するのは、小松原Ⅱ遺跡や、それに接する蛭田坪遺跡・津井切遺跡です。遺跡からは掘立柱建物が見つかっていますが、小松原Ⅱ遺跡の建物は、柱を据える穴が1m近くあり、堅田遺跡の建物のもと同等です。また、硯なども見つかっていますが、これは文字を必要とする郡衙やお寺から出土することが多いことなどからも、日高の郡衙は奈良時代後半において

は小松原Ⅱ遺跡周辺に移っていたと考えることができます。そのように考えていきますと、奈良時代後半に小松原Ⅱ遺跡付近に郡衙があり、別寺があり、そして吉足の家も近くにあったと想定することが可能かと思われま

す。郡寺が存在しますが、別寺が郡寺であったことも想像することもできません。

色々と推論を重ねましたが、小松原Ⅱ遺跡にあった寺は、平安時代の瓦がなく、土器類も少ないことから、早い段階で廃絶した可能性があります。その後、鎌倉時代には再び寺院が建てられたことが位牌や笹塔婆などの出土から窺えます。そして、室町時代には湯川氏の館跡が築かれますが、この段階で、堀の掘削などで大きく土地改変され、寺の痕跡は消滅したものと考えられます。

参考文献 日本靈異記(下) 中田祝夫著 講談社学術文庫 (川崎雅史)



日高郡衙跡 (堅田遺跡)

特集② 平井遺跡、平井Ⅱ遺跡の出土遺物等整理業務から見えること

和歌山市平井所在の平井遺跡、平井Ⅱ遺跡は、第二阪和国道の建設に伴い平成24年度から同26年度にかけて現地の調査が行われました。その後、本年度から出土遺物と調査で作成した記録類を整理する「出土遺物等整理業務」と言う作業を開始しています。

遺物の量は、私たちが遺物の収納に利用する「コンテナ」（容量28L）と言う長方形の箱に415箱あります。この箱の中には、平井遺跡、平井Ⅱ遺跡では僅か1点の縄文土器を始め、各時代を通して江戸時



平井遺跡第1次調査で見つかった縄文土器

代の遺物まで、多くの土器、石器、木器があります。

2015夏号「特集和歌山城跡の整理」でもお伝えしたとおり、整理作業の手順は、基本的に同じです。しかし、遺物の内容が大きく違ってきます。

今回は、このような整理作業を通して見えてくることを古い時代について紹介していきます。

縄文時代 東西に延びる県道建設に伴う楠見遺跡の調査の折に、通常は調査されていない古墳時代の生活面より約1m50cmも深い地層から縄文時代後期（約4000～3000年前）の縄文土器が発見されています。平井遺跡から出土した縄文土器はこの楠見遺跡との関係が考えられるかもしれない。この頃、調査地の南側には海が迫っていたものと考えられます。

弥生時代 弥生時代中期（約2100年前）では、平井遺跡から集落と墓の跡が発見されています。調査地では、西側に集落が、そして周囲に墓が隣り合わせて位置



平井遺跡第3次調査で見つかった方形周溝墓

することが分かってきました。この配置は、平井遺跡独特の配置ではなく、紀の川流域全般に認められる配置であることも、最近の幾つかの調査で明らかになってきています。

また、弥生時代では、終末期（約1800年前）の土器も僅かですが確認できます。残念ながら、弥生時代終末期の人々が遺した生活の跡（遺構）についてははっきりしたことは分かっていません。

古墳時代 古墳時代の営みの痕跡は、大



横穴式石室から見つかった耳飾り（銀箔）



土のう洗浄で見つかった耳飾り（銀箔）



隣の横穴式石室から出土した耳飾り（金箔）



平井遺跡第4次調査で見つかった横穴式石室



横穴式石室の土器の出土状況

大きく分けて後期（約1500年前）と終末期（約1400年前）に分けて見ることができます。

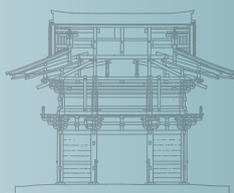
中でも埴輪窯（後期）と古墳の横穴式石室（終末期）の発見は重要な意味合いをもっています。

古墳時代後期から飛鳥時代へ

整理作業の一つとして、調査現場から採取してきた土砂の中から重要な遺物を探し出すこともあります。今回は平井遺跡の第4次調査で発見した古墳の横穴式石室の中に埋まっていた土砂を採取してきました。土のう袋にして約240袋分になります。上段と下段の写真は現地調査の折に見つかった耳飾り（耳環）で、中段の写真の耳飾りは土砂を洗い出して見つけたものです。その他、土砂を洗い流した中からは、刀の鞘金具・鉄釘・鉄鋌などの断片が多数見つかっています。このことから、古墳に埋葬された人物は、木の棺に納められた男性であった可能性が考えられます。

何と言っても重要な発見は、一片の土器のかげらから始まり、大量の土器の破片まで、語ってくれることは山ほどあります。私たち、文化財センターの職員は、日夜、考えています。昔の生活は、昔の埋葬はどんな風であったのかと。

（土井 孝之）



総持寺総門の保存修理

和歌山市梶取に位置する総持寺は、梶取本山などとも呼称され、県内における西山浄土宗の中心的寺院です。

境内には方九間の本堂をはじめ、釈迦堂や開山堂など江戸時代の大規模な建物が並びます。そのなかで最も古く、十七世紀中期の建物とみられる総門・鐘楼と、安政六年（一八五九）建立の本堂が平成十四年に県の文化財に指定されています。

本堂は平成十九年に修理されましたが、総門と鐘楼も建物全体の傾斜や柱などの沈下が目立ってきたため、平成二十七年二月から修理工事を実施しています。比較的破損が軽微であった総門から半解体修理を進め、今年十月に完成しました。

総門は、大きな扉を受ける二本の丸柱の前後に四本の控柱が配される四脚門形式で、両脇には木塀が付属します。今回の修理では、柱の沈下による建物全体の歪みが大きくなっていったため、一旦本瓦葺屋根を分解

した上で各柱の高さや傾きを調整し、基礎を補正した上で耐震壁や鉄骨製枯木などによる補強を施しました。また足元で腐朽が進んでいた木塀は一旦すべてを分解し、柱に根継修理などを施したうえで組み立て直しました。

今回の修理に伴う調査で、総門の腰長押が丸柱位置を頂点とした山型に据えられ、控柱は腰長押位置から下部分が、それぞれ南北方向外側にくの字に曲げられていることがわかりました。これらは中世の四脚門の特徴が江戸に入って省略されていく過程を示すものと考えられます。

また、本瓦葺屋根の鬼瓦には宝暦十一年（一七六一）と記されていますが、他の瓦も同時期のものであることが確認されました。建てられてか

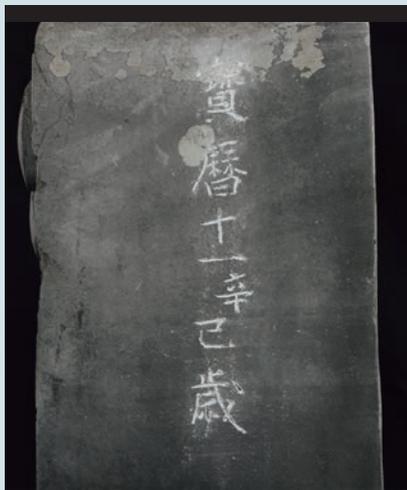


写真1 鬼瓦に記された宝暦十一年の籠掻き

ら百年ほどですべての瓦が替えられるのは異例なことですが、寺の記録に当時の第三十四世龍峰義仙上人が「一山の諸建造物に大修理を加え、且つ諸堂の荘厳品を調整して寺観の面目を一新した」とあることが確認され、あらためて修理時の史料調査の重要性を知らしめる結果となりました。

竣工した総門に引き続き、一旦すべてを分解した鐘楼の修理に取りかかります。平成二十八年のお盆までには、すべての工事が完了する予定です。（多井忠嗣）



写真2 竣工した総門

文化財建造物修理技術者の道具 ② 水糸・下げ振り

今回は水平垂直を確認するときに重宝する道具を紹介します。日本建築をご覧になり、美しく絶妙な角度で積み重なる部材の姿や軒反り等の曲線美に目を奪われたことはないでしょうか。実は、この美しさは当時の職人が計算して演出したものです。これらを分析したり、図面に起こす際に用います。

「水糸」は建築するとき材料の傾きを真っ直ぐに調整したり、配置の高さを合わせる時に必須の道具ですが、私たちが調査などで使用する際には曲材の実測に多用しています。方法は、まず基点を決めて、それらを結ぶようにピンと張り付けます。そして、水糸で作った直線から材料の要点を等間隔でおさえて端部までの長さを測っていくのです。そうすると、段々と図面に材料の曲線を再現していくことが出来るのです。

「下げ振り」は柱など、軸部の傾斜を調査したい時に使います。ただ糸に重りを付けて垂らしている訳ではありません。目的として構造的に破損して傾いているのか、それとも時代的な様式としてわざと傾かせているのか。そういった違いを見極めるように意識しながら測るようにしています。

文化財建造物には、それぞれの形に隠された技術や意味が詰まっています。建物の背景にある様々な事柄を想像しながら、お近くの寺社建築の微妙な違いを見比べて歩くのも面白いでしょう。(大給友樹)



水糸を設置して実測



下げ振りで柱の傾斜を見る

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

発掘屋余話 ③ 風土記のお山

岩橋千塚古墳群は、和歌山市の東郊、標高150mほどの岩橋丘陵を中心とする大規模な群集墳です。4世紀末から7世紀中頃にかけて造営された墳墓で、総数800基以上とも言われており国の特別史跡に指定されています。群集墳で特別史跡になっているのは、宮崎県の西都原古墳群とこの二つだけです。その価値の高さがうかがい知れますね。まさに和歌山の至宝といつていいのです。ふもとに紀伊風土記の丘資料館があることから、筆者は愛着を込めて「風土記のお山」と呼んでいます。

このところのお山が元氣です。新たな追加指定にむけて整備・調査が進められており、その一環として当センターでも平成15年から三年をかけて「大日山35号墳」の調査をおこないました。この調査では国内ではじめてとなる翼を広げ飛んでいる鳥をかたどった土輪、「飛ぶ鳥」が発見されずいぶん話題になりました。

その後も県教育委員会が中心となり、山のいただきに造られた首長墓と考えられている大規模な前方後円墳の調査がおこなわれており、昨年「大谷山22号墳」を、今年「天王塚山古墳」の調査がおこなわれました。とりわけ今年調査が実施された「天王塚山古墳」は、墳長が88mと、和歌山県内で最大の古墳となることが判明し、注目をあつめました。

現地説明会も開催されましたが、ふもとから30分もかかる山道だけに何人の人が見に来てくれるのだろうかと不安だったのですが、当日は280名を超える盛況ぶり。それも下は5歳の子どもから80歳を超える高齢者まで。ありがたいことでした。

それにしてもあの勢いには圧倒されましたね。飛ぶ鳥が出土したときをはるかに凌駕する人数でした。こういう元氣さを「飛ぶ鳥を落とす勢い」と言います——。

(村田 弘)

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2015年冬～2016年春)

(公財) 和歌山県文化財センター

- 「歩いて知るきのくに歴史探訪～湯川氏の故地を訪ねる～」
集合場所：JR御坊駅前広場 2016年 1月30日 (土) 9:30～11:30
- シンポジウム「紀中・紀南の旗頭 湯川氏の城・館・城下町」
御坊市中央公民館 2F 大会議室 2016年 1月30日 (土) 12:50～16:30

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 冬期企画展「くらしと漆器～紀伊風土記の丘収蔵品展～」 2016年 1月13日 (水)～2月21日 (日)
- 風土記講座③ 2016年 2月 6日 (土)
- 発掘体験 2016年 2月11日 (木・祝)
- 春季企画展「古墳出現期の紀伊国」 2016年 3月15日 (火)～

和歌山県立博物館

- 企画展「紀州の四季を描く」 2015年12月12日 (土)～2016年 1月17日 (日)
- 企画展「紀州を旅する」 2016年 1月23日 (土)～3月 6日 (日)
- 企画展「海の国・わかやま」 2016年 3月12日 (土)～4月17日 (日)

和歌山市立博物館

- 特別陳列「歴史を語る道具たち」 2016年 1月13日 (水)～2月28日 (日)
- コーナー展示「絵画にみる米づくり、南方熊楠と小笠原誉至夫」 2015年12月 1日 (火)～2016年 3月27日 (日)

高野山霊宝館

- 「秋季企画展「宥快・長覚展 (仮)」」 2015年10月 3日 (土)～2016年 1月11日 (月・祝)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 「(上) 小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡 調査区2、(下) 平井遺跡 第1次調査地全景 (西から)」
- 2 特集① 「幻の寺 別寺 一小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館発掘調査整理業務から一」
特集② 「平井遺跡、平井Ⅱ遺跡の出土遺物等整理業務から見えてくること」
- 6 文化財建造物課 短信「総持寺総門の保存修理」
- 7 きのくに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具 ② 水糸・下げ振り」
「発掘屋余話② 風土記のお山」
- 8 催し物案内

風車73 (2015・冬号)

平成 27 年 12 月 28 日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
maizou-1@wabunse.or.jp